

宮城英語学校と長崎英語学校の教育事情*

堀井 政 信†

1 はじめに

学制は教育の近代化に大きな役割を果たしたが、その運用は試行錯誤的であった。その結果、学制の頒布後も、教育関連の方針や法令が頻繁に改められることとなる。明治の初期は学校制度や教育課程の模索期であったと言える。

これまで明治初期の教育事情を数学を中心に実証的に考察してきた。明治初期に存在した官立の学校の数はまだ少なく、また、学校のあり方やそれを取り巻く環境は現代とはかなり趣を異にしていた。(1) 第三高等中学校『図書原簿2冊目』[1], 『大坂英語学校年報』(学科沿革) [2], 『大坂英語学校校表』(日課一覧表) [3] より、大坂英語学校(明治7(1874)年12月～明治12(1879)年4月)は西洋数学を原書(英語)を用いて教えていた。ここでは、アメリカの Charles Davies (1798-1876) の図書が教科書として用いられていた。それらは、フランスの Pierre Louis Marie Bourdon と Adrien Marie Legendre の著書を基にしていた。大坂専門学校(明治12(1879)年4月～明治13(1880)年12月)でも原書(英語)を用いて西洋数学を教えていた[4]。(2) 大坂英語学校では外国人教員と日本人教員の両方が数学を教えていたが、日本人教員が外国人教員より上級の科目を担当していた。また、同じクラスで外国人教員と日本人教員の両方が算術を担当し、それぞれ試

*津田塾大学 数学・計算機科学研究所 第13回数学史シンポジウム, 2002.10.20

†滋賀県立瀬田工業高等学校, e-mail: masa.horii@nifty.ne.jp, キーワード: 数学, 教育, 宮城, 長崎, 英語

験をしていた。そして、第九学年（明治10年9月～11年8月）より外国人教員が数学を教えなくなった。外国人教員の担当科目はとても多岐に渡っていた。履歴より、数学を教えていた外国人教員の中に、数学の専門教育を受けた者は見つからなかった。数学を教えていた外国人教員は、いずれも英語教員として雇用されていた。日本人教員は主に個人指導を受け、あるいは自修により数学を学んだ。外国人から英語を学んだ者はいなかった。(3)『大坂英語学校年報』（生徒入退表）および『大坂専門学校年報』（生徒景況）より、1年間の入学者数とほぼ同数かそれを大きく越える数の生徒が学年末までに退学していた。(4)『科学史研究』の「田中舘博士を囲みて明治初期の我が科学を偲ぶ」[5]より、授業料が主因とは考えられない。当時の小学校の教員数(1～2名/校)、授業科目(英語がない)、生徒の就学状況より、生徒には洋算と英語の両方の学力が不足していた。語学力および洋算の素養に起因する教育上の困難が、大坂英語学校から大坂専門学校にかけて存在した。(5)大阪中学校(明治13(1880)年12月～明治18(1885)年7月)になって退学者の割合が大幅に減少した。数学の教科書が翻訳書に代わり、教員は数学以外も含めてすべて日本人となった。

明治7(1874)年に、7つの大学区の各本部（東京、愛知、大坂、広島、長崎、新潟、宮城）に1校ずつ官立の英語学校が置かれた。本報告では、宮城英語学校と長崎英語学校の教育事情について現存の史料を調べ、大坂英語学校と比較対照する。また、官立英語学校の廃止と西南戦争の関係について再考する。

2 官立英語学校の設立

明治のはじめ、高等教育、特に高等な専門教育を学ぶためには外国語の知識は必要不可欠のものであった。学制発布のころまで、南校や東校の学科課程はほとんど英・独・仏などの語学が中心であり、特に重視されていたのは英語であった。政府は、学制発布後、南校・東校を専門教育機関として充実させる一方、全国各大学区に官立英語学校を設置する方針をとった。明治六年十一月、既設の第一大学区独逸学教場と外務省の外国語学所とを開成学校内の外国語学校に合併して官立東京外国語学校を設置した。そし

て、「また七年三月から四月にかけて愛知・大坂（阪）・広島・長崎・新潟・宮城に官立外国語学校を設置した。同年十二月東京外国語学校から英語科を分離して東京英語学校とし、右の六校も各英語学校と改称した。」のである。これらの英語学校は課程の種類や規模などはさまざまであったが、明治九年ごろには卒業生を開成学校へ送り出すようになり、東京大学とその予備門が設置されるまで重要な役割を果たした [6]。

明治政府は、既存の開成学校内の外国語学校と他2校を合併して、官立東京外国語学校を設置し、また、明治7年3月から4月にかけて、既存の開明学校（大坂）、廣運学校（長崎）をそれぞれ大坂外国語学校、長崎外国語学校と改称した。また、明治7年3月29日、文部省布達第十三号 [7]により、愛知、広島、新潟、宮城の外国語学校を新たに設立した。そして同年12月、東京外国語学校から東京英語学校を分離し、他の6校をそれぞれ英語学校と改称し、この結果、7つの大学区の各本部に1校ずつ官立の英語学校が置かれることとなった。

3 宮城英語学校の教育課程と教育事情

まず、明治7年に新しく設立された英語学校の中から、宮城英語学校について述べる。宮城外国語学校は創設間もない明治七年十二月、その校名を宮城英語学校と改め、もっぱら「英語学」を修める者と、将来専門学校へ進む者の両者とともに収容する教育機関として再発足した。その教育課程は、「明治九年制定した「教則」によれば、宮城英語学校は、おのおの六級制の前期三年の下級語学科と後期三年の上等語学科とから成り、専門学校へ進学を希望する者は、前期下等語学科を終了すればよいとされ、「語学ヲ専修スルモノハ」上下二等の語学科を一貫して修学すべきもの」とされた。6年12期の課程であり、同時期の大坂英語学校と同じである。

また、「明治八年中 入学生徒四八名、退学一七名、昇級八四名、降級六名」とあり、入学生徒の4割近くが退学している。同時期の大坂英語学校と同様に退学者が多い。また、「現員 下等四級二八名、同五級四〇名、同六級三三名、計一〇一名（内寄宿生四五名）」とあり、上等語学科には生徒がいなかったことがわかる。「明治九年七月 生徒四〇名募集するも志願者五

名」とあり、生徒集めにも苦勞していたことがわかる。そして、「明治十年一月 生徒募集停止。明治十年二月 下等語学科初の卒業生七名。かくて明治十年二月、文部省の各官立英語学校廃止の方針によって宮城英語学校は、その三年あまりの歴史を閉じることになり、その施設・設備等は県立仙台中学校に引き継がれた。」とある。上等語学科の卒業生を出すことなく、設置されてから3年足らずで廃止され、県立仙台中学校になった [8]。

4 長崎英語学校の教育事情

次に、既存の学校から英語学校となった中から、長崎英語学校について述べる。『長崎県教育史、上巻』に、「県立長崎中学校五十年を偲ぶ座談会に於ける釘本小八郎翁の談（昭和十一年一月）（以下、「釘本小八郎翁の談」）」 [9] がある。そこに、「その後初めて官立になって廣運学校といふものになったのであります。明治の六、七年でせうか、廣運学校になって初めてクラスができました。日本人の教師も僅かは居りましたがけれども大概是外国人で、テキストブックは皆原書でした。我々は前からやってをったので上級に繰込まれました。」、また、「この廣運学校が變遷してしまひに英語学校となったのです。英語学校となつてからは誠に立派なクラスが出来て、日本の教師も大分増しましたが外国人もまだ三名ばかり居りました。」、そして、「テキストブックはイングリッシュで学校が貸して呉れ、贅沢なもので、その他紙、鉛筆に至るまで学校から給与して呉れました。尤も上級生丈だつたと思ひます。」とある。外国人教員が原書（英語）を用いて教えていたことがわかる。

「私もアーノルドといふ先生について居りましたが、先生は私共のやる地理、数学、化学、歴史、それにイングリッシュの文法、作文、習字等を一人で全部受持つて皆よく分かつて居られたので感心しました。今の先生には出来ずまい。」とあり、外国人教員の担当科目が多分野にわたっていたことが書かれている。大坂英語学校と同様である。また、「外人の教授ぶりですか。訳は分からん。訳も意味も言はない。歴史なんかも読んで向ふの間にイングリッシュで答えねばならん。Grammerが大分訳語には助かりました。」とあり、英語で進められる授業に生徒は苦勞していたことがわか

る。また、「その時の授業時間は五時間位、休みは十分といふ様な事はなく続けてやる。」とある。

「明治十年の二月に官立は廃校になり、西南の役の時で、学校が病院になって負傷者が来ました。その前九年の初め頃、上級生の或者は大学の方に選択されました。五名許りは自費でしたが、私共は自費で行く事が出来ないで、皆貸費生といふ名目で東京の大学に行く事になりました。」とある。廃校になる前年の明治9年始めに、長崎英語学校の上級の生徒が貸費生として東京に送られていた。

『文部省第二年報』に、明治7年2月に長崎外国語学校を視察したダヴィット・マレーの申報 [10] が載っていて、「校長余輩ニ告ゲテ曰ク、外国語ヲ学ビ、外国ノ芸術ヲ研究セント欲スルモノ此近地ニ其数甚少シト。(中略) 余ヲ以テ之ヲ考ウレバ、其根源ハ人民皆雇用ノ教員ヲ信徒スル事薄キガ故ナルベシ。若シ人民ノ希望ハ英語ヲ学ブヨリモ、日本語ヲ学ンデ日本語ニテ高等ノ教育ヲ受ントスルニアラバ、既ニ某ノ学区内ニ於テハ中学教育ノ学校ヲ設立スルノ時至レリヤ否ヤヲ思考スベシ。」とある。長崎英語学校の校長は、視察に来た文部省学監ダヴィット・マレーに、近隣に外国語を学び諸科目を勉強したいと考える者がとても少ないことを訴えている。

長崎英語学校でも、外国人教員と日本人教員が原書（英語）を教科書として教えていた。外国人教員が英語で進める授業に生徒はとても苦勞していた。長崎英語学校の校長は、視察に来た文部省学監ダヴィット・マレーに、生徒がなかなか集められないことを訴えている。また、長崎英語学校は明治10年2月に廃校になるが、前年の明治9年の初めに、上級の生徒が貸費生として東京の学校に送られている。このことは注目すべきである。

5 宮城英語学校と長崎英語学校の県への移管

『文部省第四年報』の「文部省布達第一号 明治十年二月十九日 輪廓附」 [11] に、「當省所轄第一大学区東京女学校、第二大学区愛知師範学校、愛知英語学校、第四大学区広島師範学校、広島英語学校、第五大学区长崎英語学校、第六大学区新潟師範学校、新潟英語学校、第七大学区宮城英語学校、當第一学期限り（本月十四日）廃止候條此旨布達候事」とある。宮

城英語学校、長崎英語学校を含む5つの英語学校は明治10年2月14日に廃止された。

宮城英語学校は明治7年4月に伴正順の校長任命があったが、開校は12月8日まで遅れた。開校が遅れたのは校長更迭があったため、開校時には下斗米精三が校長であった。一方、明治10年10月19日に廃止となるが、そのまま県に移管され、同月26日には仙台中学校が発足した[12]。宮城英語学校は開校が8か月遅れたのに対して、廃止後わずか1週間で県立中学校となっている。

『長崎県教育史、上巻』に「長崎英語学校其儘本縣御下渡之儀ニ付伺」[13]が載っていて、「(前略)右廃校ニ付イテハ行先更ニ建設不致テハ不相叶候得共、諸費多端ノ際容易ニ行ハレ候儀ニモ無之。且是迄ノ生徒モ中途廃学方向ヲ失ヒ候者モ不少候ニ付、右英語学校地所建物及書籍器械等其儘本県へ御下渡相成候ハハ、何トカ方法ヲ設ケ依旧保存可致ト存候條、別格ノ御詮議ヲ以テ至急何分ノ御指令相成候様致度。(中略)明治十年二月十四日

長崎県令 北島秀朝、文部大輔 田中不二麿殿」とある。すなわち、官立長崎英語学校の県への移管申請の公文書の日付は、明治政府が廃止を決めた当日であり、正式な布達が出た日より早い。官立の宮城英語学校と長崎英語学校はいずれも、廃校になった直後にそれぞれの県から土地、建物、書籍等の移管申請が出され、速やかに県立の学校となっている。

6 官立英語学校の廃止と西南戦争

明治10年2月に宮城英語学校と長崎英語学校を含む官立学校9校が廃止されたが、それは西南戦争が始まる前であった。そして、『文部省第四年報』の「明治九年七月至明治十年六月処務概旨」[14]をみると、廃止した後に、他の官立学校に多くの施設を新たに築造している。その頃は西南戦争が始まっており熊本で激しい戦いが行われていたにもかかわらず、当時の貨幣価値から考えて非常に多額の費用を文部省より支出している。東京医学校解剖所(9072円)、東京師範学校教場(3518円)、教育博物館、大坂英語学校教場(2985円)、東京大学医学部土蔵(3047円)である。また、東京大学を設立している。

7 終わりに

明治政府は当初から財政的に厳しい状況にあった。学制で計画された学校の多くは設立されなかった。また、明治初期に各英語学校は生徒集めに苦勞しており、中途退学者や留年者がかなり多かった。

長崎英語学校が廃止される前年の明治9年の初めに、上級の生徒が貸費生として東京に送られている。宮城英語学校は廃止の前月に生徒募集を停止している。すなわち、宮城英語学校、長崎英語学校ともに、廃止になるかなり以前から廃止に向けての動きがあった。

明治政府が宮城英語学校と長崎英語学校等を廃止したのは、西南戦争で実際に戦いが始まる前であった。そして、熊本での激しい戦いの最中に、残した官立学校に建物を築造するため、多額の費用を支出している。また、東京大学を設立している。

宮城英語学校と長崎英語学校はいずれも、廃止になる前あるいは直後にそれぞれの県から土地、建物、書籍等の移管申請が出され、速やかに県立学校となっている。つまり、西南戦争が始まるかなり以前から、廃止後のための準備がされていた。

以上より、明治10年に多くの官立英語学校が廃止されたのは、西南戦争による財政緊縮の影響というより、当時の英語学校の運営状況や置かれていた社会環境から、明治政府が官立英語学校を見直し整理したことの方が大きいと考えられる。

参考文献

- [1] 第三高等中学校『図書原簿2冊目』, 103,107,109頁, 京都大学総合人間学部図書館所蔵
- [2] 大坂英語学校『第八学年従明治九年九月至同十年八月年報, 大坂英語学校』, 15-18頁, 『第九学年従明治十年九月至同十一年八月年報, 大坂英語学校』, 8-11頁, 京都大学総合人間学部図書館所蔵

- [3] 大阪英語学校『明治九年十一月刊行，第八学年一期自明治九年九月至明治十年二月校表，大阪英語学校』、『明治十年十月刊行，第九学年一期自明治十年九月至同十二月校表，大阪英語学校』，京都大学総合人間学部図書館所蔵
- [4] 大坂専門学校『大坂専門学校一覽，明治十三，十四年』，9-28頁，京都大学総合人間学部図書館所蔵
- [5] 「田中館博士を囲みて明治初期の我が科学を偲ぶ—昭和十八年四月十七日 於大東亜會館—」『科学史研究』No.6（1943年），56-57頁
- [6] 文部省『学制百年史』帝国地方行政学会（1972），220頁
- [7] 文部省『文部省第二年報』宣文堂書店（1964），5頁
- [8] 宮城県教育委員会『宮城県教育百年史，第一卷明治編』，ぎょうせい（1976），159頁
- [9] 長崎県教育会『長崎県教育史，上巻』，長崎県教育会（1942），758頁-764頁
- [10] 文部省『文部省第二年報』宣文堂書店（1964），25頁
- [11] 文部省『文部省第四年報』宣文堂書店（1965），附録第一 1頁
- [12] 宮城県教育委員会『宮城県教育百年史，第一卷明治編』，ぎょうせい（1976），651頁
- [13] 長崎県教育会『長崎県教育史，上巻』，長崎県教育会（1942），757頁
- [14] 文部省『文部省第四年報』宣文堂書店（1965），附録第一 4頁